

世界文学紀行を始めたいきさつ

「世界文学紀行」——我ながらなんて大げさなタイトルをつけたことでしょう。

定年留学を終えて出版した拙著の「あとがき」で、これから世界の名作の舞台を訪ね歩くと
いった決意を綴りました。そんな“見果てぬ夢”が果たして実現するだろうかとの危惧もあり
ました。でも、第1作「ドン・キホーテ」についての記事・写真が郷里の信濃毎日新聞に
連載(5回)されたことに後押しされて、結果的に2005年からの12年間に11カ国15
作品の舞台を訪れることができたのでした。

なぜ、こんな旅に取り組んだのか。一つは高校時代の国語教師で担任でもあった恩師の言
葉にありました。

「キミたち！そんな数年で消えてしまうような薄っぺらな本ではなく大作に取り組みなさい、
大作に。まずは数世紀を経て今なお読まれている古典だな」。

もう一つは大学時代の名物商学部長の檄でした。「早稲田は地球の上にあります！」との大言
壮語で世界に学ぶ大切さと海外への雄飛を訴えていたのです。

そしてSGI(創価学会インタナショナル)会長の池田大作先生から、いつも世界に目を開い
ていることと、いくつになっても学ぶことの大切さを指導されていたからです。

現役時代に10年間、特派員として南北アメリカ大陸を駆けていたことも要因となりま
した。せっかく身につけた外国語(英語・スペイン語)や取材・執筆また写真撮影の経験を
活かしたい、との思いもあったのです。

定年になって観光で海外に出かける人は数多くいます。でも、見たものを残さなければ本
人の満足のみで終わってしまう。拙いレポートや写真でも新聞や雑誌またホームページで
の紹介により他人様にお伝えすることができます。

取材旅行には当然お金がかかります。旅は1回に1週間から10日間くらいで10万円
から30万円ほどになりました。ときどきレポートや写真が新聞や雑誌に掲載され原稿料
が入ることもありましたが取材費の半分にも届きません。私も年金生活者です。生活費をつ
ぎ込むわけにもいきません。そこでいろんな仕事をして費用を賄ってきました。

実は私は留学から帰国直後にうつになってしまいました。その結果いくつもの有望な仕
事のすべてを辞退せざるを得なくなってしまった。そこで誰でも受け入れてくれるシルバ
ー人材センターに入り、駅前の自転車管理の仕事から始めました。体調が回復してくると他
の仕事にも取り組むようになったのです。

一方、取材費をできるだけ安く抑えるために、フライトはエコノミーの中でも最も安いチ
ケットを、ホテルは三つ星以下のものを探してきました。こんなことが可能になったのも言
葉ができたから、と感謝しているところです。また訪れたほとんどの国にSGIメンバーが
いて文化会館もあって交流できたのもありがたく嬉しい一面でした。

人生いつになっても夢を抱いていることが大切だと思います。これからは、近場の中国と
韓国を訪れ、さらに2年後の金婚式の際には特派員時代にお世話になったパナマへ感謝を
伝える旅を予定しているところです。“見果てぬ夢”は続いていきます。